

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370354

研究課題名(和文) 現代フランスにおける プロジェクト 的作品に関する研究

研究課題名(英文) Research on Project Arts in contemporary France

研究代表者

塩塚 秀一郎 (Shiotsuka, Shuichiro)

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：70333581

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：マスペロ、コルタサルら、現代作家によるルポルタージュの分析から明らかになったことは、プロジェクトの意義は計画が破綻なく成功したときではなく、自ら定めたはずのルールが破綻したときあるいは危機に瀕したときにあらわれる、という事実である。また、ペレックの著作を再検討することにより、速度と功利主義に縛られ、日常と親密な関係を結びたい現代人にとって、実存的制約(主体の行動を縛る制約)を含む遊戯的アプローチが、なかば自動化してしまった生活を具体的に改善する手がかりとなりうることを示した。

研究成果の概要(英文)：What has become clear from the analysis of reportage by contemporary writers such as Maspero, Cortasar and others suggests that the significance of the project appears, not when the plan succeeded without fail, but when the rule set by himself failed. Also, by reviewing Perec's writings, a modern person, bound by speed and utilitarianism and unable to connect intimately with everyday life, has a playful approach including existential constraints (constraints that bind the behavior of the subject), to improve concretely the living life that was automated.

研究分野：フランス文学

キーワード：プロジェクト 実存的制約 ペレック 日常

### 1. 研究開始当初の背景

1990年代以降のフランス文学を特徴づける潮流のひとつとして、都市の日常を記録する文学がある。それらの作品には対象と方法の両面において共通するところがある。すなわち、都市の日常生活における取るに足りない細部を記録しつつ、いずれも、自ら定めた何らかの規則に従う「実験」ないし「プロジェクト」の性質を帯びているのである。「日常の探求」と「実験的プロジェクト」の結びつきは単なる偶然なのであろうか。それとも、両者には、現代社会の有り様を認識する際に求められる必然的な関係が想定されるのだろうか。本研究を着想した背景には、以上のような疑問があった。

### 2. 研究の目的

本研究では、プロジェクトに依拠する作品を総括的に分析することで、「日常」と「プロジェクト」の関係を明らかにし、ひいては、このような特殊な認識方法を要する現代社会の特性の一端を明らかにする。対象とするテキストや作品は、以下のようなものである。フランソワ・マスペロ『ロワシー・エクスプレスの乗客』(1990)、フィリップ・ヴァセ『白書』(2007)、フリオ・コルタサル『宇宙道路の高速飛行士』(1983)、クリスチャン・ボルトンスキー、ソフィ・カル、河原温の諸作品。ジョルジュ・ペレック『さまざまな空間』(1974)、『パリのひとつの場所を書き尽くす試み』(1975)など。

### 3. 研究の方法

本研究を遂行する上での基盤であり、なおかつもっとも重要となる作業は、「プロジェクトに依拠する作品」群の分析である。その際、(1) プロジェクトを通じて、普段は認識されることのない「日常」のいかなる面が、どのようなメカニズムによって、浮かび上がってくるのか、(2) そうして明らかにされた日常の一面は、いかなる社会批判の射程を持ちうるのか、(3) ウリボや現代アートにおける制約、実験の機能と、文学的プロジェクト・ワークの関連はいかなるものか、といったポイントから、それぞれの作品を分析していく。その際、とりわけ、プロジェクトという「制約」の束がもつ、正負両面の働きとその影響を注意深く見定める。また、プロジェクトは行為主体やその結果に対して、相反する働きをすると予想される。何らかの行動計画が示されることによって、主体は行動に移りやすくなる。これは、主体に行為を促すという意味で「正」の働きとみなせる。一方で、計画に縛られるため、思いつきや連想のおもむくまま自由に行動することはできなくなる。これが「負」の作用である。あるいは、誰も気にとめないようなディテールを記録することで、何かが「創造」され、思考の端緒が得られる(正の作用)。反面、文字や写真などとしていったん「定着」

させられてしまったディテールは、そうでなければ生き生きとした「記憶」の中に生き続けたかもしれないものを、寒々しい「物体」のなかに閉じ込めて、「死」や「遺品」に近づけてしまう(負の作用)。このような、プロジェクトが本質的に有していると思われる両義性を正確に評価し、結果との関連を見定めることを目指す。

最終段階においては、プロジェクトや「制約」のもつ意義について総合的に考察を深める。そのために、ペレックやウリボにおける「制約下の創作」についても、作品論的ではなく、原理的に考察し直す。プロジェクトは、行為をうながすにとどめ意味づけ作業は保留しておくこと、主体を意味創造の袋小路から救う機能を果たしている。ペレックの《場所》や『パリのひとつの場所を書き尽くす試み』などに見られる主体の行動を縛る制約、つまり「実存的制約」は、従来別個のものとして考察されていたペレックによる日常観察とウリボ的創作を、ひとつの原理によって結びつけるものであり、非常に意味深い。本研究の総括として、現代文学と現代アートの双方にわたるプロジェクト・ワークを、「実存的制約」という考え方を通して統一的に理解することを目指す。

### 4. 研究成果

(1) われわれはまず、フランソワ・マスペロ、フランソワ・ボン、フィリップ・ヴァセ、フリオ・コルタサル、ジャン・ロランなどの現代作家によるルポルタージュを考察の対象とした。これらの作家たちは、ジョルジュ・ペレックによる並以下のものへの着目に触発され、自らの生に制約を課するという独特のやり方で、現代都市の日常を記録する書物を残している。フランソワ・マスペロの『ロワシー・エクスプレスの乗客』(1990)は、パリを縦断する郊外鉄道のすべての駅で降りて、たいした観光資源もない界隈を散策した記録である。フランソワ・ボンの『鉄の風景』(2000)では、パリと地方都市ナンシーを結ぶ列車の車窓風景が半年間にわたって繰り返し書きとめられている。また、『白書』(2007)の著者フィリップ・ヴァセは、パリの地図上に空白のまま残されている区画を実際に訪れ、その場所の実態を報告している。いずれの作品も、自ら設定したルールにのっとって誰の注意もひかない場所や日常の風景を記す実験的試みといってよいだろう。われわれは、これらの作品が都市に向ける視線のありようを考察したのち、各々の実験によって浮かびあがる都市風景の著者たちによる受けとめ方を具体的な記述に即して検討し、これらの試みがもつ現代社会批判の射程を明らかにしようとした。その結果、彼らのルポルタージュにおいて、しばしば戦争・紛争・破壊が喚起されていることを見出した。たとえば、パリ近郊の町の多くは、普仏戦争から第二次大戦に至る

まで、たびたび戦禍に巻き込まれており、マスペロは街ごとに細かい数字を挙げてその被害を書き記している。どうやら、日常の風景に萌芽あるいは痕跡として潜んでいる破壊の契機が、マスペロやボンの衝動と深く関わっているようなのだ。『ロワシー・エクスプレスの乗客』の巻頭近くでマスペロは、自身が住むパリ中心部の再開発による変貌が、郊外探索の動機のひとつとなったことを示唆している。一方、ボンが見つめたフランス北東部の町々は、産業構造の変化により工場閉鎖に見舞われ、衰退を余儀なくされている。その変貌は決して自然現象のように生じたわけではなく、資本の、強者の暴力によってもたらされた結果であることは、ルポルタージュ小説『デーウ』が告発している通りである。また、白いゾーンの探訪中に何度も戦場を歩いているような気がしたというヴァセは、自分の企ては結局、戦争の痕跡を調査することだったのだ、と述べている。もちろん、ここでの「戦争」とは都市開発が引き起こした葛藤の比喩的な表現なのであるが、すぐさま、ヴァセは自分の計画がそもそもの出発点において本物の暴力とも関わるものであったことに気づくのだ。軍事施設もまた地図上では白く表示されるからである。こうした暴力への言及は、効率最優先の社会風潮を告発し、現代社会の日常風景を襲う各種の破壊に抗う目的でなされているとともに、破局への予感に促されたものであるとの結論を得た。

(2) つぎにわれわれは、主に以下の作品を分析した。1. ダンロップとコルタサルの『宇宙道路の高速飛行士』(1983) 2. ジャック・レダ『パリの子午線』(1997) 3. ソフィ・カルの『ゴッサム・ハンドブック』(1998) 4. 河原温の『デート・ペインティング』。1は、一ヶ月間、パリ・マルセイユ間の高速道路から出ないで暮らした記録であり、2はヴァーチャルなものである子午線を可視化したメダルをだどる道行きの記録である。これらの分析から明らかになったことは、プロジェクトの意義は計画が破綻なく成功したときではなく、自ら定めたはずのルールが破綻したときあるいは危機に瀕したときにあらわれる、という事実である。たとえば、あるパーキングエリアにおいて、コルタサルはルールを破って高速道路の外部に出ることを夢想している。このとき、プロジェクトは危機に瀕しているとも言えるが、これをきっかけとして、コルタサルはホモ・ルーデンスとしての人間の本质について思索し、我々の日常を縛っている暗黙の約束事について考察し始めるのだ。美術史家のトニー・ゴドフリーは、コンセプチュアル・アートの本質のひとつとして、挫折を直視しそれと折り合いをつけることを挙げている。また、現代のプロジェクト・アートに大きな影響を及ぼしたジョルジュ・ペレックは「計画やプログラムの特質は決して守られないということ」であると述べ

ている。

(3) 続いてわれわれは、ジョルジュ・ペレックによる日常観察のあり様を、『さまざまな空間』という著作に基づいて考察するとともに、ペレックによるプロジェクト・ワークの影響についても、これまでの研究を総合するかたちで論をまとめた。ペレックをはじめとするさまざまな作家やアーティストによるプロジェクト・ワークの根幹をなすのは、主体の行動を縛る「制約」であるが、『さまざまな空間』では制約が作品の生成原理となっているわけではない。だが、この書物は社会の効率至上主義に抗し、「緩慢さ」を称揚する目論見の一環として、「ゆっくり書くこと」および「ゆっくり見ること」という、制約の新たな効用を提示している。『さまざまな空間』によって提案される「実存的制約」(主体の行動を縛る制約)は、ユダヤ人の苦難にも、戦争孤児という境遇にも、芸術の使命にも、直接結びつくことはなく、その名称にもかかわらず、いわゆる「実存」との関わりがもっとも薄く、遊戯的色彩が強いように感じられる。しかし、速度と功利主義に縛られ、日常の空間と親密な関係を結びがたい現代人にとって、実存的制約を含む遊戯的アプローチは、なかば自動化してしまった生活を具体的に改善する手がかりとなりうる。ペレックは『さまざまな空間』をはじめとする著作によって、「実存的制約」のこうした効用を示したと言え、前年度までに調査を終えたヴァセ、マスペロ、ボンらの文学者はペレックの遺産の後継者であるともみなせる。一方で、今日、ペレックの受容は文学よりアートの領域で強く実感されるのも確かであり、クリスチャン・ボルタンスキー、ソフィー・カル、河原温らの作品やパフォーマンスにも、「実存的制約」とみなしうる側面がある。とはいえ、前二者は確かにペレックとの関わりを口にしてはいるものの、河原温がペレックを意識していたという証拠は管見のかぎり存在しないし、そもそも「日付絵画」が開始されたのは一九六六年であるから、ペレックの企てよりも前なのである。では、影響関係ではなく同質性を問題にすることはできるだろうか。河原温の「日付絵画」とは、単色に塗られたキャンバスに制作当日の日付のみを白抜き数字とアルファベットで描く、という試みであり、その制作は画面に描かれた日付当日のうちに終了しなければならない、というルールも定められていることから、確かにこれは「実存的制約」に基づく企てと言えるだろう。だが、「日付絵画」における「実存的制約」は、「ゆっくり見ること」や、習慣の裏をかき現実の未知の領域を開示させることに寄与しているようには思えない。「日付絵画」の意味や効果は、たとえば、日付を刻された画布が当日の数時間を費やして描かれていること、日付表記の仕方によって画家の滞在地が分かること、数十年分にお

よぶ「時間」を美術館の一部屋に集積すること、など諸々の要素からおのずと生じるものであろうが、いずれにせよ、ペレック的発見術としての性格は薄いと言わざるをえない。この河原温の例から端的に分かるように、今年度の調査によって、「実存的制約」の継承という面に限れば、現代アーティストたちよりも、フランソワ・ボンら文学者による試みのほうが、ペレックの精神により近いかたちで、実験的方法の可能性を追求していることが示された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Shuichiro SHIOTSUKA, La fonction du savoir imaginaire dans *La Vie mode d'emploi* de Georges Perec, Arts et Savoir, 査読有, no 5, Université Paris-Est Marne-la-Vallée, 2015, 電子ジャーナル  
ISSN : 2258-093X, URL :  
lisaa.univ-mlv.fr/arts-et-savoirs/

Shuichiro SHIOTSUKA, Le quotidien et la violence - regards sur le paysage urbain chez quelques écrivains français contemporains, 仏語仏文学研究(東京大学) 査読有、第49号、2016、659-669

[学会発表](計3件)

Shuichiro SHIOTSUKA, Augustus a-t-il lu « Voyelles » ou « Vocalisations » ? - la logique diégétique et celle lipogrammatique dans *La Disparition* de Georges Perec, *Écriture formelle, contrainte, ludique: l'OULIPO et au-delà* (Colloque international), 2015年10月29日, Université de Zadar (Croatie)

塩塚 秀一郎、制約下の翻訳は何に対して忠実であるべきか—ペレック『煙滅』の翻訳を題材に考える、第4回翻訳ワークショップ・シンポジウム「条件付きの翻訳」、2015年7月25日、北海道大学(北海道・札幌市)

塩塚 秀一郎、W島を描写する声は誰のものか?、シンポジウム「声と文学：インデックスとイリュージョン」、2014年9月27日、東京大学(東京都・文京区)

[図書](計6件)

塩塚 秀一郎、中央公論新社、*ジョルジュ・ペレック 制約と実存*、2017、456

塩塚 秀一郎 他、平凡社、*声と文学 拡張する身体の誘惑*、2017、183-197

Shuichiro SHIOTSUKA et autres, Measdarmédia, Entre jeu et contrainte : pratiques et expériences oulipiennes, 2016, 143-152

塩塚 秀一郎 他、弘学社、*芸術におけるリライト 「書くこと」と「書き直すこと」*、2016、125-139

Shuichiro SHIOTSUKA et autres, Edición de Universidad de Burgos, *Littérature et appétit des savoirs*, 2014, 113-122

塩塚 秀一郎 他、勉誠出版、*文学から環境を考える：エコクリティシズム・ガイドブック*、2014、99-115

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

塩塚 秀一郎 (SHIOTSUKA, Shuichiro)  
京都大学・大学院人間環境学研究所・教授  
研究者番号：70333581

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

( )